



妙窓稽後

四

15
1601
4







一集外歌仙を狩野通長小令せし九回画を添へしなりとを

峯炭竈

平常縁

千景今常流三景  
東六郎流頼末

立のふらねのたもとに及炭竈知をともしとや之後の志を

残春

津守國豊

任吉社務  
信長時代人死

ふらねとふらねをそとふらねのふらねふらねのふらね

山月入簾

淨通尼

光隆院殿後室

秋の初めは月をいひし月をいひし月をいひし月をいひし月

春祝言

宗長

後柏原院御宇  
連哥郎

春の初めは月をいひし月をいひし月をいひし月をいひし月

舟舟恋

宗碩

連歌師

舟の初めは月をいひし月をいひし月をいひし月をいひし月

月前丁

宗閑

能登

初めの初めは月をいひし月をいひし月をいひし月をいひし月

晴雪

正徹

徹書記  
招月菴

初めの初めは月をいひし月をいひし月をいひし月をいひし月

初達意

正廣

世日腹正廣

初めの初めは月をいひし月をいひし月をいひし月をいひし月

浦栲衣

兼裁

指苗氏  
仙臺連哥印

秋深くを移尾の浦如西人古志のく移衣の如く移

冬野

道灌

大田

かゝ衣をを中乃草の花為あはるのけりもあはれたり

寒芦風

長慶

三好修理大夫

難波凡入はふく言言をえくあはれ移衣の移を心く

旅宿叢

宗養

連哥印

風を移あはれたり言言移衣の移を心く

関雪

政宗

伊達中納言

ゆきを移移衣の移を心く

梅香留袖

兼与

指苗氏  
兼裁子

梅袖の白くを移衣の移を心く

遠村鶏

玄棟

里村  
花下先祖

を移衣の中はけり言言移衣の移を心く

侍花

昌俊

伏川昌六

侍花の移衣の移を心く

佛名夕

绍巴

連歌印

夕の佛名夕を移衣の移を心く

初冬時鳥

宗牧

連歌印

初冬時鳥の移衣の移を心く

田 磨

玄 旨 細目

さ清のまゝに不田雪舞り鹿乃膏のまゝに加さるる暮してや

行路時雨

心 前 連教師

かゝるる多秋如山凡吹くやうやうなる雨いそぐ

柳

元 就 毛利大膳大夫

長柳の糸くうくうをそのまゝに流さるる物もも

閑 居

氏 康 北條五郎大夫

中々不徒ぬたを磨もあつた山はるる山の下

松 百 花

晴 信 武田大膳大夫

五葉ふくしをちりれ山はるる松少子に花をまき

寄 秋 祝

氏 政 北条

多礼松屋小川の終り松の千年の葉代はるる

山 家 初 冬

尚 澄 惣社坂本

山家の鈴竹の煙赤いあつたを 命にまきまき

月 思 往 事

長 晴 東山若狭少輔

世の人の月を詠る かくるる 心 前 連教師

圓 月

宗 祇 連教師

長久保の月を詠る かくるる 心 前 連教師

月 前 述 懐

心 敬 僧都連教師

あつたもゆきまきまきを かくるる 心 前 連教師



筆の吹やうと思ふふ又と豊家子子近く吹やうと云ふの事  
三甲者を今乃信問ふある太神崇神子兼手法手経業  
なるものなるもの多し雅集の古代の物々々孫子唐書のある事  
と云ふ今乃と見章推多記のうらむ世俗の信樂と格別の  
物々々云北音壞の遠いあるものや凡人皆思ひ居ぬ事人  
信者古今同しその事ぬをそ年々古くは俗人の信やうと  
すも多うなる信と云ふ

一京師子車通下五賣小極を賣老翁あり吉久と云寛政八  
年丙辰百十歳と云壯健なり流石の極をうと勅免毎日  
自身小極を流方に出く事ありと云い健なり故一乘殿下  
鉄石軒といふ號を賜ふ之外王族貴人争ひ居る事あり  
と知れぬ流石極をも老翁と云い流石流石新吉久と  
流しと賣之妻九十七才あり壯健なり未歸と云以上極  
數十集の事を保つる名と云い流しと目か及せぬ事

一寛永年間 大納言殿の管轄の達人ありと云孫更小院  
登り地所と云地所一即同列の御家子延喜御物の在置能  
巖といふ古昔あり極信と云を御流し思ふ毎及流石不  
ありと云い彈し流し一か一かやと云成るもの物信借也  
及しと知れぬ事と云信口押し流しと云拜領の事及  
極信と云事と云門外と云出と云記と云を御流しと云























價貴に茶種を質作偽造の如き一子をく人參熊膽テリ  
アカヲクリカニキリの類 厚物あるを不稀なり人皆病危き  
乃時不尚とてい 家を破るをも言金を却て是を如茶を買  
亦名を用系古物あるは唯何の事し七無とて家を破  
て余物も亦と実ふは面一記乃不問とて茶種を偽る者  
懐わつて第一なり其外の古画古書如の類を偽作して人  
欺くにあつては子と云ふもも唯既昇の物なり人の目を  
懐くむとて是を偽るも真を通りて偽る印一を偽作  
するも偽なりとて思ふ

一 三石丹下茶師は此何某の茶種何某の如く茶を扱て一子西人  
改改ふ今納金ふ如言 形形早種をいへる方名を茶西子奔  
遠人髪一 辻者加列名茶之立入を由書居ハ所可代へ鑑入り  
と非常の時を為人も買はれけは人記才を偽る心をも成  
て丹下出迎つて對面して改改の面をわつてと待たぬ  
ても主人出見し候候り不疑とて是果改改とて物を言居  
やとも思へとも初めの招請の事なれを其後知得とて主人今  
や出迎つて一刻も早に面して候てとて一刻の百も千  
と出迎ふ心地して酒席も福居る主人も亦了古茶種を言  
や亦用く出見者主人候てとて一向に主人一刻も扱今日  
とて君を待たせしとて折あつて古茶種は生を言ふ元





よふ竹小價の三はれども筆紙物も唯書夢の口の免し紙を  
上中下の名とて世に書も書もたゞそのなり流し勝りてふ  
物を究るも家の筆室小の筆紙の言名ありけりその物も  
何れも價を張るも引出物をも去得るも其益乃名譽ある  
物しりその流しをたゞるも不心中をいひせせ一期せの百  
を恩哉焉之々不ありやけの心何れもあふ其加何と道に  
ふつとも不為の言名も及ぬしあふその内の流しを記あり  
さる紙を習ふ也し他人をよめればその名必しやけりふ心  
をいひるふ不筆紙の言一しとて、統統と書糾も難る筆と  
一筆の名匠小道に書書とてふ言も道に名匠ありまふも道

は乃作の筆を抄る人言筆なりそ道に筆も数代ある  
中ふなり書定最上ありとて道に筆流きと長門名匠あり  
長門の作は道に筆多しとて後ふさく人のいひし者も若  
くはつりて道に書定ありと大に勝りてと余多くをいひ何  
も、勝りて言ひし者も優者をあはし

一筆を志貴の末等の作紙最上とて末尊の作の中ふも二つ  
帯といふ筆殊小名物なり

一筆花陰とて陰の柄小冊き造り言多流を付く歌陣へ  
陰を入しんといふ言多流を一放し流しあけてその勢い小  
系し陰を入しんといふ言多流の勢いを流しとて又紙を張









色不押... 彼町人... 何者... 同宗... 色...  
 ... 何事... 今... 遠...  
 ... 乃者... 何所...  
 ... 今...  
 ... 山寺氏...  
 ... 紙... 火...  
 ... 何...

一淮南子曰火不若取... 不若鑿井... 世百...  
 ... 何... 又人...  
 ... 人... 求...  
 ... 淮南子曰... 周有上伊... 七... 今...  
 ... 伊... 止...  
 ... 上...



丘臨水有伏山其下巖淦水深不測二黃龍見長出十六丈  
身大於馬拳頭顧望狀如圖中畫龍燕室丘民皆觀見之去  
龍可數十步又見狀如駒馬小大凡六出水遠戲陵上蓋二  
龍之子也并二龍為八出後二時乃入云

一漢土乃画赤福祿壽の圖小陶朱公周文王南極老人狀用  
也又蝙蝠鹿龜の三物を画くも何事又三白の為とつて  
何事雪中河辺雪狀画く又月霜海邊画くも何事

一安永三年甲午五月廿七日より廿九日あり尼ヶ崎海中より小  
龍蟹類しく登り浪華の川に兩岸皆蟹と成淀川地さし  
て登りし金ヶ谷浪流伏見場より川辺をりしありし

川の氷狀汲小一掬の中小蟹數十枚ありし其蟹の大き豆の  
しく色もく透明あり

一同六月廿三日大風至上乃瓦飛ぶ木の葉乃をり大坂近邊  
乃海も大浪起り溺死の人數万といひし其翌廿四日の夜  
半大坂町中山此言起り津浪出來り大坂町へ海とある  
と言罵り男女老弱無不泣き逃避す皆或る令浪を獲り  
一飯鉢持をりし其騒動も許さず大坂中残るも如斯  
しく騒動せる町あり誰いひ知りたりといふも其終を  
不思儀の事なり其余ハ母如漢しく安永在り夜明け不成  
て静まりし



乃こく不覺く四方をく廣く去暗くして唯恐りし事なき  
動もせずとていふをさきも怪しむとて其の如く廣く  
掘りしり大なる佛像の摸さぬ小なる土中に埋まると  
其の像の腹小穴の如く里人佛像の腹中の炭入る事なり  
其大なるもの如く一店をなると穿入るかたの物を掘りし  
實所小所をく一村の傍動ある處にけし埋まると  
其の如く何れも穴の如く厚板板板ありしもの如く埋  
まるとして畠中觀母方へ東國よりや来りしとて掘りし  
事なり

一河原心八知村太郎生村辺山の中ホメキとて此の如く人なりし

是故食へも身体不覺く増えし

一近江京河小一老男子の如く婦人の乳汁を飲るを好む  
初産の婦人の乳房堅く乳汁の如く其の如く吸りし乳  
汁乃そ故通るといふなり初産の婦人皆此を人かまの乳  
て乳を吸出さむけを人日夜諸方小拓れし乳汁の如く飲  
他の飲食せるとして五雜俎小穰城の人年二百四十歳此の飲  
食の如く唯乳汁のみ食用して壯健なりと云ふ乃老人  
も長壽の如く云ふなり

一河原玉勝陽村の徳島方秘近にありし余り門人橘春庵  
居の地あり隣村定方村小細といふ女十五六才の如く

く男子と成る 則ち名は平と改む 延平七年 寛政六年甲  
寅三十四五才なり 壯美長大の男少く 妻物も具せし 春菴  
常々之をいふなり

一 寛政甲寅春 傷中 小槍 地居の女子 松とよき 一夜 祭 延平く  
重く 男子とよき 年十七八才なり 松とよき 改名 松とよき  
京都の人 中山元倫 松とよき 傷中 小下 延平く 尺と 柳 延平く



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including names like '中山元倫' and '松とよき']*

